初期ニーチェにおける文化の構想と哲学

――ショーペンハウアーと前プラトン期の哲学者たち――

江藤信暁（上智大学大学院）

本発表は、Fr・ニーチェ（1844-1900）の思想における哲学（真理探究）と文化の関係についての考察である。とりわけ、彼の思索活動の時期区分で初期とされる期間に焦点をあて、ショーペンハウアーや古代ギリシアの哲学者たちの哲学的な思想内容への言及と、ニーチェの同時代のドイツ文化への批判・提言との関係をより明らかにすることを試みる。本発表では、おもに未完の遺稿「ギリシア人の悲劇時代における哲学」（1873 年までに大部分を執筆、以下『悲劇時代』と略記）をとりあげ、この時期のニーチェがどのような真理探究の営みを高く評価しているのかという点から出発したい。

ニーチェの高く評価する真理探究の営みは、どのようなものなのか。彼は、とくに初期では、同時代の思想（家）や潮流への批判を展開するが、その一方で、古代ギリシアの哲学者たちを称揚し、また同時代における稀有な哲学者としてショーペンハウアーを挙げる。同時代への批判としては、科学（Wissenschaft）に向けられたものがある。これは複数のテクストに見出すことができる。知にはほんらい知りうるもの・知られるべきものとそうでないものの区別があるが、科学は、あらゆるものを知りうるもの・知られるべきものとしてしまっているという。また、『反時代的考察』第三篇「教育者としてのショーペンハウアー」（1874 年刊、以下『教育者』と略記）には、懐疑主義や相対主義といった傾向に向けた批判もある。この傾向は、近代における絶対的な真理への疑いから生じたものだという（カント哲学の通俗的な影響として説明される）。こうした批判は、ニーチェが古代ギリシアやショーペンハウアーに拠って立つことでなされている。ニーチェは、古代ギリシアの哲学史における区分として、タレスなどのソクラテスに先立つ哲学者たちと、ソクラテスを含む彼以降の哲学者たちに分ける見方を採用しない。そして、ソクラテスを含むプラトンより前の哲学者を前プラトン期の哲学者（Vorplatoniker）と呼び、称揚する。また、ショーペンハウアーへの肯定的な言明は初期著作の随所にあるが、とくに『教育者』では、模範的な人間像として哲学者ショーペンハウアーが提示される。このようにニーチェは、とくに古代ギリシアの哲学史と同時代のドイツの思想的状況を観察し、評価と批判を行っている。では、結局のところ、彼が高く評価している真理探究の営みはどのようなものといえるのか。

この問いにとりくむために、本発表ではまず、『悲劇時代』の叙述から、前プラトン期の哲学者たちとショーペンハウアー哲学にニーチェが見てとった共通点を探る。『悲劇時代』は列伝形式のギリシア哲学史であり、タレスから叙述が始まるのだが、各哲学者についてニーチェ流の解釈・評価がなされる。とくにヘラクレイトスは、古代ギリシアのひとつの典型とされ、最も高く評価されている。その叙述のなかでは、ショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』から引用がなされ、また、思想の説明にショーペンハウアー哲学の語彙が用いられている。このような近代と古代を行き来する叙述が可能なのは、ニーチェが双方の思想に共通点を認めていたからだろう。では、その共通点とは何か。

その共通点は、さしあたり彼自身が『悲劇時代』で用いる語彙でいえば、「弁世論（Kosmodizee）」という哲学のありかたである。これは弁神論／神義論（Theodizee）をもじった造語であり、ニーチェの友人 E・ローデが書簡で『悲劇の誕生』（1872 年刊）について述べたものである。弁世論とは、この世界の個別者のもとにある不正・苦しみを、世界全体（Kosmos）から説明し、正当化するというものである。ニーチェによれば、ヘラクレイトスは、火という根源的なものがさまざまな個物の姿をなす事態として、世界を把握している。この思想が弁世論だといえるのは、（火として）世界が全体として捉えられており、（火という）根源的なもののはたらきで万物の生成が説明されているためである。そして、この弁世論の基礎にあるのが「永遠の正義」だという。これはショーペンハウアー哲学の概念であり、「時間的な正義」――法律に基づく刑罰を通じて現実化する正義――と区別され、盲目的な「意志」による個物としての「表象」の生成と消滅を統べるものを意味する。ヘラクレイトス思想でいえば、万物の生々流転を司る法が永遠の正義だということになる。ニーチェによれば、ショーペンハウアーもヘラクレイトスも、ともに弁世論的な哲学を持っており、永遠の正義を基礎に置いた世界理解をしているということになる。

さらには、ショーペンハウアーからの影響の色濃いニーチェ自身の思想もまた――ローデの指摘した『悲劇の誕生』にかぎらず――弁世論的である。『悲劇の誕生』五節の有名な一文「美的現象としてだけ、生存と世界は是認されている」が意味するのは、世界全体を統べる「根源一者」とそれによって創造された諸々の個物との関係を通じて、世界全体が是認されているということである。また、『教育者』では、個物である人間が、世界全体を意味する「自然」との関係を（再度）結ぶ可能性について述べられる。そこでは、「自然」の視点から、個物も正当化される。ここまでのことから、初期ニーチェにおいて、弁世論的な思想が高く評価されており、この時期の特徴ともなっていることがわかる。また、弁世論と永遠の正義の概念に注目することで、ショーペンハウアー思想と初期ニーチェ思想の影響関係のひとつを見ることができる。

こうしたことを踏まえ、本発表では最終的に、ニーチェが古代ギリシアやショーペンハウアーに見た弁世論という哲学のありかたと、彼の同時代への批判の関係を明らかにしたい。以下ではさしあたり、前提となる点を指摘しておく。『悲劇の誕生』でも、その直後に執筆された『悲劇時代』でも、古代ギリシア的な文化のありかたを当代に復興することが目指されている。前者では、悲劇とともにあったギリシアのありかたが、ヴァーグナーと彼の楽劇で再興されうることが説かれた。後者では、前プラトン期の哲学者たちと彼らを輩出したギリシア文化が、ショーペンハウアーとドイツ文化として再現されることが示唆される――この意図は、公刊著作としては『教育者』で、よりショーペンハウアーに焦点をあてて語りなおされる。つまり、ニーチェは『悲劇時代』や『教育者』で、卓越した人間像を提示できるような文化を求めたのである。『悲劇時代』の近代と古代を行き来する叙述は、一見すると時代錯誤だが、こうしたニーチェのドイツ文化についての構想に関わるものだったといえる。そして、こうした人間像の提示とともに、同時代の科学とは異なる弁世論的な世界理解の再興と継承も求められている。『悲劇時代』などの叙述では、古代を顧みることで、近代の真理探究への批判と、その探究の担い手である人間像の継承が試みられているのである。